

第三の教育現場から

—— 地域社会のもつ教育力 ——

北御牧VYSたけのこの会

会 長 野 村 伸 弥

現在の社会、昔よりも子どもと付き合えるおとなが少なくなっている。家庭でも、学校でも、社会でも、昔と今では子どもたちとのふれあいの場面や人や時間のちがいに気付かれると思う。それ等が原因で家庭では親子の断絶、家庭内暴力等が起き、学校では校内暴力、いじめ、それに対応できない弱い先生と教育。そして社会では低年齢化している多くの非行問題が起きている。さらに、それらを他人事のように見る社会の目が一層それを助長しているのではないだろうか。

この三つの分野を行政ではそれぞれ、家庭教育、学校教育、社会教育として分けているが、共通していえることは、“教育”の“教”の部分だけが優先してしまっていて“育”の部分がとに残されているように思えてならない。学業成績の良し悪しだけが子どもの評価を決めるものではないはずである。“育”とは人が人らしく生きる力をつけてやることではないだろうか。こう考えると、冒頭で申し上げた昔と今のちがいは、この“育”の部分にあるように思う。

“教”の部分は周知のとおり、日々高度な知識や技術、情報等が知らされ進んできたが、“育”の部分を教えてくれる人や場所はどうだろうか。すなわちこの“育”を家庭ではしつけといい、学校では道徳といい、社会では常識とか良識と言われている部分ではないかと思う。また、それらを教えてくれる人は、家族であり、先生であり、我々（地域社会に住む全ての人）ではないかと思う。しかし、現実には、この三者の連携がうまくとれているとは言い難い。昔と今のちがいが一番クローズアップされ、注視されなければならないのはこの点ではないかと思われる。

昔は、それを話してくれ教えてくれる誰かが必ず家族の中に、先生の中に、そして地域社会の中にいたように思う。それが近年、個性の尊重だとか、価値観の多様化とかいう言葉に押されて、子どもたちの中にもおとなの中にも我慢する気持ち、協調や協力する気持ちが消され、勝手気儘を尊重しているのではないかと思えるような身勝手な自由を、おとなは子どもたちに与えてしまったのではないだろうか。その結果がさまざまな青少年問題として湧出してきたのだと思われてならない。

今こそ、こうした現象と問題を前述の三者が連携をとりながら真剣に取り組まなければならない時期に達していると思われる。期を逸すると、子どもたちにとっても社会・将来にとっても新たな問題を生むような気がしてならない。

私は、こうした現状を打破する手だてとして、青年層の社会参加活動に大きな期待がかけられると思う。青年こそ、子どもたちに一番近い所にいるふれあえる仲間だと思う。それは年齢も思考感覚も、その持っているエネルギーも一番近いし、何よりも近い将来、必ず同じ社会を担う仲間になるはずだから…。そして家庭や学校や、特に行政はその青年層の位置付けと育成のための指導や援助の策を是非考えていかなければならない。青年の持っている未知数のエネルギーが、昔から社会を動かし、歴史を創ってきた。そのエネルギーを今こそ、将来を託す子どもたちのために生かしていこうと思う。